

りゅうおう  
龍王の舞

みんなのおじいちゃん、おばあちゃんがまだ生まれておられなかった頃の、むかし、むかしのおはなしです。

野間谷が沼谷といわれていた頃、この辺りは、道も山も川も田圃もなく、沼地が、ずうっとどこまでも続いておりました。

さるたひのむて  
猿田彦命という神様は、龍王ともいわれていました。ある日、お供の獅子と一緒に雲の上から下の方を見ておられました。

ちやうど沼谷の上に来られた時、神様が大きな声でいわれました。

「おお、あそこに広い沼地があるぞ。あれを耕した

ら、ええ田圃になるやろうのう。ひとつ、わしらが田圃を作ってみようやないか。獅子よ、おまえも手伝うてくれるか。」

「はい、神様。ええ田圃になるんやったら、おいらも喜んで手伝いましょう。」

さっそく神様と獅子は、あかあかと燃えている松明まを持って雲に乗り、天船あまふねという所へ降りて来られました。

天船の土は泥んこで、歩きたびに足が、ずるっ、ずるっとなり、うまく歩くことができません。

「ここは思うたよりじゅるいのう。おととととと、

あっ、しまった。」

ドレーン

「あーあ、泥んこになってしもうた。」

神様は、泥の中を転んだり、尻もちをついたりしながら歩きまわり、東の方には川を、西の方には田圃を、真中に道を作ろうと考えられました。

神様が考えられたとおりに獅子が、鼻で土を掘り

起こし、出てきた石を、川になるところまで持って行きました。

ある日のこと、獅子がいつものように土を掘っていると、大きな石にぶつかりました。

「あっ、痛たたた。ああ痛あ。もうちょっとで鼻が折れてしまうとこやった。ああ痛かった。それにしても大きな石やなあ。でも

おいらは力持ちや。動かして

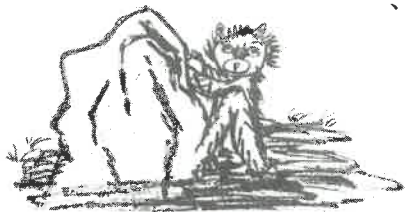
みせるぞ。よいしょ、よいしょ、

よいしょ、よいしょ。」

獅子は、顔をまっ赤にしてがんばりましたが、石は少しも動きません。

「神様、この石は大きすぎて、おいらの力では動かへんから手伝うて下さい。」

「それは困った。では、一緒に動かして みようかの。」



「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ。」

二人は、力をいっぱい出して石を押ししましたが、

石は少しも動きませんでした。

神様も獅子も、汗びっしょりでふらふらです。

「あーあ、やっぱりあかんわ。」

「神様、もうやめて、他の所を探しましょう。」

「いやいや、ここは、山と山に囲まれたええところじや。こんなええところに田圃ができれば、人間たちが喜ぶぞ。それに、毎日毎日動かせば、きつと石は動くぞ。獅子よ、それまでがんばろうやないか。」

「そんなら、もういっぺんがんばってみましょか。」

それから二人は、大きな石を動かし続けました。それでも石は少しも動きません。でも、二人は一生懸命がんばりました。

何日かすぎたある日、大きな石はぐらっと動き、ごろん、ごろん、ごろんと転がり始めました。

「わあ、動いた、動いた。」

神様と獅子は手を取りあって喜びました。神様と

獅子の目から、涙がつうつと流れおちました。

「あっ、神様の手、傷だらけで血が出とる。痛そうやなあ。」

「獅子よ、おまえの鼻のまわりも、石ですりむいたんやの。血が出とるぞ。かわいそうに。」

でも、二人とも、ちっとも痛くはありませんでした。毎日しんどかったけれど、今はとってもいい気持ちです。

それから、神様と獅子は歌を歌いながら、何日も何日もかかって、田圃と道と川を作られました。

りょうおん りょうおん

りょうおん りょうおん りょうおん

泥んこだった所が、少しずつ小さな田圃になっていきました。

やがて、道に草が生え、川にはきれいな水がさらさらと流れて、魚が泳ぐようになりました。

ある日、お米がたくさん取れるような所はないかと探して、男の人たちがやって来ました。

村の人達は、神様の顔を見るなり、

「ひえー こわいよう、助けてくれー」

と言って、逃げ出しました。

「おうい、わしは優しい神さんじゃ。ええ事を教えてやるから、戻ってこーい。みんな戻ってこーい。」

村の人達はそれを聞くと、そろり、そろりと戻ってきて、そうつと神様の顔を見ました。

真つ赤な顔に大きな目、高く伸びた鼻、大きな口。それは天狗さんの顔でした。でも、にこにここと笑っておられました。村の人達はその顔を見て、神様がす

っかり好きになりました。

「稲が枯れてしもたそうやのう。そんなら、よう水ぬきをして、この豆を作ってみたらどうや。これは大豆というてな、炊いて食べたら、とってもおいしい豆じゃよ。」

「水ぬきするて、どうするのですか。」

「田圃の中に、小さな溝を作ったの、田圃の水が流れるようにするのじゃよ。そして、この大豆を植

「ここはええとこやなあ。水はきれいし、ここやったら米がようけ取れるぞ。」

「ちょっと土がじゅるいけど、ほんまにええとこや。」

「そんなら、もっとみんなをよんでこうか。」

「うん、そうしよう。仲間を大勢よんできて、みんなで米を作ろうやないか。」

やがて、二人、三人と人びとが集まってきて、村ができました。

村の人達はさっそく、田圃に稲の苗を植えました。初めは青あおと育っていたのに、どうしたことか、どの田圃の稲もだんだん枯れていきました。

「一生懸命せわをしたのに、なんで枯れてしまうねやろ。水もいっぱいあるのにな。」

「水がいっぱいいたまりすぎて、根が腐ってしもうて、枯れたんとちがうやろか。こんなじゅるい田圃では稲があかんのや。」

「そんなら何を作ったらええねやろ。」

村の人達が困っている所へ、神様が来られました。

えたらええのじゃ。」

「大豆？こんな固い豆をどないして植えたらええのですか。」

「土に穴をあけての、そこへ豆を二粒ずつ入れ、その上に泥の土をかぶせたらええのじゃよ。」

村の人達は、神様にもらった大豆を、教えてもらった通りに植えました。

神様はそれを見て安心され、獅子と一緒に雲に乗り帰っていかれました。

こんどは枯れるどころか、ぐんぐん芽を出し、秋には青い豆がいっぱいできました。

「おうい。うちの田圃にこんないっぱい豆が取れたぞ。」

「わしとこの田圃にもいっぱいや。うれしいこっちゃ、ありがたいことじゃ。」

「この田圃で初めて取れた豆や、神さまに一番最初に食べてもらおうやないか。」

「そうやな、神様にお供えして、みんなでお礼を言おう。」

「神さんの面も作ったらどないやろ。」

「そんなら、どんな面を作ろ。」

「神さんと天狗さんと同じやから、天狗さんの面を作ったらどないやろ。」

「それがええなあ。」

「その天狗の面をかぶってお祭りしたらええな。」

赤とんぼがいっぱいとんでいる、秋晴れのある日、村のはずれにある鎮守様の前に、白い大きなのぼりが立てられ、お祭りが始まりました。

ドーン ドーン ドーン ドーン

力強い太鼓の音が、山やまに響きわたりました。

村中のおとなやこどもが、塩で茹でた獅子豆を持って集まって来ました。

「神様、おかげで大豆がようけ取れてありがとうございます。ございました。どうぞ、食べてください。」

「神様、豆がたくさん取れておおきに。来年もいっぱい取れますようにお願いします。」

お神酒がみんなにまわされて、男の人も女の人も獅子豆をいただきながら、お神酒を飲みました。

みんながいい気分になったころ、若くて元気な政やんが天狗の面をかぶり、長い矛ほこを持って、みんなの前に走りできました。

「おっかあ、こわいわあ。」

見ていたお花ちゃんは、あわててお母さんの後ろにかくれました。

「あれはな、田圃を作ってくれたった神様のお面をかぶった村の人やで。」

「ふーん、天狗さんが神さんやったんか。こわい顔しとったったんやなあ。」

「顔はこわいけど、心はやさ



しい神さんやったんやで。」

天狗の面をかぶった政やんは、長い矛を振りまわしながら、お宮さんの庭を右へ、左へと走りまわりました。

りょうおん りょうおん

りょうおん りょうおん りょうおん

夕日を浴びた境内で、政やんの踊りまわる龍王の舞は、いつまでも、いつまでも続いておりました。

※ 龍王即ち猿田彦命が天舟に天降り給い、排水路、

田畑の区画測量をされたのでこの儀式舞を行い、これを龍王の舞という。この儀式舞は、太古、この地創業にまつわる伝説として、猿田彦命の道案内に引き続き獅子が来て、荒地を掘り返し田畑を作ったことを擬したものといわれている。

天船(坂本、中村、横屋、下村)の秋祭りに、行なわれている伝統行事である。

— 八千代町史より —